

19. 髄液検査を契機に診断された白血病の髄膜浸潤

三谷智恵子 伊藤優紀 大谷寿雄(成田赤十字病院)

【はじめに】今回、髄液検査にて白血病細胞を疑ったことが診断のきっかけとなった白血病の髄膜浸潤を経験したので報告する。

【症例】44歳 男性

【主訴】手足のしびれ、歩行困難

【既往歴】糖尿病、高脂血症、高尿酸血症(健康診断で指摘、内服なし) 出血性胃潰瘍、ピロリ菌陽性(除菌を自己中断)

【入院時検査結果】WBC 4300/UL (Seg 62%, Lymph 30%, Mono 5%, Eosino 3%, Blast(-), Hb 14.7g/l, PLT 23.2万/UL, RETC 0.6%, PT% 80%, PT-INR 1.15, APTT 27.0秒, TP 7.1g/dL, ALB 4.2g/dL, GOT 34U/L, GPT 83U/L, LD 198U/L, ALP 282U/L, T-BIL 0.4mg/dL, UN 14mg/dL, Cre 0.91mg/dL, UA 4.9mg/dL, Na 142mEq/L, K 4.0mEq/L, Cl 103mEq/L, Ca 9.6mg/dL, HDL-C 29mg/dL, LDL-C 153mg/dL, TG 467mg/dL, CK 133U/L, AMY 43U/L, CRP 0.21mg/dL, 髄液細胞数 1083/UL, 多核球 <1/UL, 単核球 1083/UL, 髄液 TP 1348mg/dL, GLU 48mg/dL, LD 430mg/dL, CRP 0.06 mg/dL

【入院後経過】8月5日よりC5-6病変に対して局所照射開始。また、AraC+MTX+Hydrocortone 髄注開始。

【考察】白血病細胞が末梢血や骨髄中では消失している完全寛解期で、髄液腔内でのみ白血病細胞が増加することがある。髄膜白血病は急性リンパ球性白血病の頻度がもっとも高く、N/C比の高い細胞の単一増生が認められる。

【まとめ】症例は白血病の完全寛解期であったが、髄腔でのみ白血病細胞が増加するいわゆる髄膜白血病の病態であり、髄液検査で再発を疑うことができた。髄液で異常な細胞が認められた場合、臨床に報告して病歴などを確認し、より精密な形態学的検査を行うことが重要である。

0476-22-2311(内)2282

20. 当院におけるeGFRと尿沈渣の有用性
蓄尿を必要とするCcrは本当に必要か?

三谷智恵子 坏隆之 砂本留美子 須藤真由香
佐藤美子(成田赤十字病院)

【はじめに】腎臓での糸球体濾過値(GFR)を評価する指標として、内因性クレアチニン・クリアランス(Ccr)が日常多く用いられている。しかし、Ccrは24時間の蓄尿を必要とし、患者への負担が大きい。今回、われわれは、eGFRと尿沈渣が糸球体濾過値を推測するのに有効であるかを検討した。

【方法 CcrとeGFR】対象は、Ccrの検査依頼があった20歳以上の患者376名とした。得られたCre測定値を換算式に代入してeGFRを算出し、24時間蓄尿法で求めたCcr値との相関を検討した。Cre測定には、アクアオートカイノスCREを用い、日本電子JCA-BM2250型自動分析装置にて測定した。

【結果】eGFR(x)と24時間蓄尿法で得られたCcr値(y)の間には直線的な正の相関が得られた。

$$y = 0.9649x + 8.3056 = 0.7919$$

【方法 尿沈渣とeGFR】対象は、尿沈渣の検査依頼があった患者161名とした。尿沈渣の円柱成分を A:硝子円柱4個/H P F以下 B:硝子円柱5個/H P F以上 C:上皮円柱が出現 D:顆粒、ろう様円柱が出現の4つに分類した。

【結果】尿沈渣の成分のうち、円柱はeGFRの低下とともに段階的に増加した。eGFR30以下では硝子円柱は減少したが、腎の障害を示唆する各種円柱が増加した。

【まとめ】今回行った検討から、一定の限界はあるものの、eGFRの算出は迅速性、簡便性の面から、腎機能評価に蓄尿を必要としないスクリーニング検査として有用であると考えられた。尿沈渣においては各種円柱が出現するような場合にeGFRの低下が認められた。蓄尿をしなくても随時尿で腎機能を反映する検査として有用であると考えられた。

0476-22-2311(内)2282